

Japan Shakuhachi Professional-players Network The 2nd regular concert

日本尺八演奏家ネットワーク(JSPN) 第2回定期公演

＜日本のプロ尺八演奏家たちの競演＞

Performance by Japanese professional shakuhachi players

—尺八の音は「楽音」と「噪音」をどのように行き来しているのか—

Musical-tone and Noise-tone included in Shakuhachi Sound

「尺八ではどのように用いられ、その音はどのように伝わるのか」  
専門家による音響的な解説も含めてお聴き頂きます

楽音 + 噪音  
尺八

出来るかぎり楽音(純音)に近づけようと進化した洋楽器  
楽音とともに噪音を大切に育んできた和楽器

Western musical instruments evolved to approach Musical-tone (pure tone)  
Japanese traditional instruments have valued Noise-tone and Musical-tone sounds equally  
"How is it used and heard in Shakuhachi music?" Listen to audio commentary by experts

2021年

5/13 (木) 16:30開場 / 17:00開演

豊洲シビックセンターホール

[東京都江東区豊洲2-2-18]

主催 日本尺八演奏家ネットワーク(JSPN)

助成 アーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団)

後援  公益財団法人日本伝統文化振興財団  
JAPAN TRADITIONAL CULTURES FOUNDATION

ARTS  
COUNCIL  
TOKYO

有限会社 邦楽ジャーナル



## ご挨拶

本日は他出の躊躇われるなかにもかかわらず、「JSPN第2回定期公演」にお運びくださりまして誠にありがとうございます。

私たち日本尺八演奏家ネットワーク(JSPN)は、「尺八音楽および尺八演奏家の価値を高め、日本文化の発展普及に寄与すること」を主たる設立趣旨とし、プロ演奏家のみで立ち上げた唯一の尺八演奏家団体です。

2019年5月の設立公演では、伝統の楽曲の互いの独創性を尊重しながら創造的、実験的な取り組みを行い、流派、ジャンルを超えてお互いを認め合うという意味を込めて「VURSUS」を表題として掲げ「伝統は受け継ぐものではなく残ったものが伝統となる」という内容で旗揚げいたしました。

去年は、新型コロナウイルス感染流行対策により、やむなく第2回定期公演を延期しましたが、感染防止への対策を講じ、尺八音楽を肌で感じていただきたく、専門施設において専門家による監修のもと「尺八吹奏における飛沫検証実験」独自に行いました。その結果を広めるため「シンポジウム+サロンコンサート」の開催と同時に動画を配信し、今回の公演にても、この実験を踏まえて万全の対策で取り組んでおります。

さて、この第2回公演では、今まで演奏が受け継がれてきた楽曲の更なる追究、尺八の音色の原点の探求はもとより、尺八の持つ特有の音色や間、音の重なりや特殊な奏法を基に新たな尺八音楽の構築を目指し、規則的な振動を持つ「楽音」と、非整数倍といった複雑な共鳴倍音を有する「噪音」に焦点をあてて、世界初演の新作を組み入れて楽曲を発表いたします。

尺八の音を究めんと飽くなき欲望に燃える我ら求道の輩の共鳴、集結する「楽音+噪音=尺八」のひとときを、どうか最後まで暖かくお見守りくださり、ご忌憚のないご意見、ご高評を賜りますようお願い申し上げます。

末筆になりましたが、このたびの公演にご尽力くださいました志村哲氏、愛澤伯友氏、正会員の関一郎氏、特別会員の各氏、また、助成をいただきました公益財団法人東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京様をはじめ、多くの皆様に心より感謝と御礼を申し上げます。

日本尺八演奏家ネットワーク[JSPN]

## プログラム

### 第Ⅰ部

海童道 道曲「**山越**」 地なし尺八 素川欣也

尺八古典本曲「**越後三谷**」 尺八 神 令

琴古流本曲「**鹿の遠音**」 尺八 倉橋容堂 石川利光

都山流本曲「**春の光**」(流祖中尾都山作曲)

尺八一部 川村泰山 武田旺山 尺八二部 野村峰山 田辺恵山 尺八三部 山口連山 柴 香山

### 第Ⅱ部

尺八三重奏曲「**風動**」 杵屋正邦作曲

尺八Ⅰ 難波竹山 尺八Ⅱ 田嶋謙一 尺八Ⅲ 元永拓

「**quo ego vado**」 愛澤伯友作曲／新作初演

尺八Left 小湊昭尚 川村葵山 大山貴善

尺八Center 田野村聡 田辺頌山 大河内淳矢 小濱明人

尺八Right 岩田卓也 松本宏平 石垣征山

「**五群の尺八のためのPentatonic Concerto**」 関一郎作曲／新作初演

指揮:関一郎 尺八Ⅰ 大山貴善 善養寺恵介 竹井誠 田野村聡

尺八Ⅱ 岩田卓也 川村葵山 徳丸十盟 米谷和修

尺八Ⅲ 坂田梁山 田辺頌山 本間豊堂 松本宏平

尺八Ⅳ 大河内淳矢 小濱明人 田嶋謙一 原郷界山

尺八Ⅴ 大賀悠司 小林純 素川欣也

## 【第Ⅰ部】 古典本曲解説 志村 哲 (編集)

各曲の解説は、それぞれの演奏者の伝承系譜と敬意を尊重したく、各人から提出された解説と、既存の資料を参照／引用して編集しております。

### 海童道 道曲「山越」

山越は、山と海とのけわしいすがたをうけて開かれたものである。そこには、山越えと波返りとの技巧が表われ、技巧中の一つ、山越えを採りて道曲の名としている(「海童道 鹿の遠音 道曲吹定・海童道祖」日本フォノグラム1979、レコード解説より)、とあります。海童道祖の世界観を解説する事は難題ですが、個人的にこの曲は 道曲の中でも野性的な豪快さが色濃く現れている一曲だと思っています。

### 尺八古典本曲「越後三谷」

この曲は、越後の明暗寺に伝えられたため「越後三谷」と呼ばれる。越後の明暗寺は、徳川時代に越後村松の城主が村松城下に建立し、のちに三条市南の下田に移転された。この寺は一寺一律(一つの寺で、一曲のみをその寺の曲として正伝すること)の方針で、この曲のみが吹徹されたが、準曲として「鈴纂」が伝えられた。神如道は、斎川梅翁よりこの曲を伝承した。(「尺八古典本曲の集大成者 神如道の尺八」テイチク1980、レコード解説書より引用)

### 琴古流本曲「鹿の遠音」

琴古流本曲、裏十八曲中の秘曲一曲。一計子より伝来、と『琴古手帳』にある。本来の曲名である《呼返鹿遠音よびかえ(へ)ししかのとお(ほ)ね》が示すとおり、二人の奏者が交互に演奏する。この吹奏形態は古典本曲ではこの曲が唯一。琴古流初期から交互演奏され、『一閑流尺八本曲譜全』(1847)にも雌雄の鹿の音声と記されていることから、鹿が鳴き交わす情景描写に噪音が多用されたと推察されるが、こんにちの演奏においては、音響的には木霊と解釈されることもある。この曲は、明暗対山派にも改編／伝承されている。また、明暗真法流本曲には同名異曲が存在する。(『尺八古典本曲の研究』月溪恒子2000を参照した)

### 都山流本曲「春の光」 流祖 中尾都山 作曲(1907年/明治40年)

都山師の作品で、初めて3拍子系のリズムが導入された曲です。「曲想は、うらかな春の光のかがやき渡る中に、森羅万象ことごとくその陽光を浴びて、嬉々として生を楽しむ」と『都山流百年史』に記載され、「春の輝き、雲雀の囀る様、胡蝶の舞う様、春霞、春光の気分」などの雰囲気が出されています。また、都山師が初めて取り組んだ積極的な和声への熱意を強く感じる構成となっていて、完全四度と完全五度を組み合わせた実験的なフレーズ。複数の声部が和声を構成する旋律の進行や、これまでの邦楽界では見られない「ホモフォニー」への実践を試みた先駆的な作品となっています。初演は三部合奏として発表され、1947年(昭和22)に全音楽譜出版から発刊された際、初代都山師が二部合奏に改編されましたが、今回は、当時の音楽を再現する目的で、三部合奏の形で演奏をいたします。(野村峰山氏による解説より)

## 【第Ⅱ部】

### 尺八三重奏曲「風動」 杵屋正邦 作曲

ふと思いついた風動という文字と語感が何となく暗示的で好ましかったので、折があったらこの題名による作品を書きたいと思っておりました。たまたま尺八三本会諸兄から作曲の委嘱があり、思案を重ねているうちに、少しずつまとまりかけてきた楽想と風動という言葉の奥にある情感とがいつのまにか一致していることに気づき、この作品を「風動」と命名することに決めました。

作品は、まず第三尺八の独奏にはじまり、第二がこれを受けて第一に渡し、次でこの反対をゆくといったように、超人のながい一呼吸を想わせるきわめて遅い「起」の部分があってから、刺激的な短い音型を随所に含む「承」の部分に入り、一変して八分の六拍子、八分の五拍子による軽快な「転」のくだりとなり、さまざまなきがあってから再びもとの静かな部分に戻り、これを「結」として終わります。

「第二回尺八三本会」1965年12月16日 第一証券ホールに於いて初演。

### 「quo ego vado」 愛澤伯友 作曲／新作初演

本演奏会のタイトルでもある「噪音」から「楽音」というテーマで作曲を依頼された。

これまで作曲した多くの作品は、ノイズの分析と再構成でその垂直成分が構築されている。尺八に含まれる無尽蔵な倍音成分やモジュレーションとも言える音色変化には魅了される。ひとつの素朴な音の上に玉虫色の倍音が閃光し、時間変化とともに響きを変化させていく。その空気感を掴んで音符に定着させるため、これまで多くの時間を費やしてきたが、未だ、その記譜法は確立できていない。

「楽音には分かりやすい音で」とも依頼された。

つまりそれは古典的和声の世界を指している。尺八は日本の古楽器。であれば、音組織も「西洋古楽」の時代。つまり、ルネサンス期の音楽を書こうと、ジョスカン・デュプレ作曲「Mille egretz(千々の悲しみ)」を最後に配置し「噪音」から「楽音」への構成を考えた。荒波を乗り越え、宣教師達がキリスト教とともに持ち込んだ木製パイプを持つ「ポジティブ・オルガン」の響きは尺八の響きとなぜか似ている。

タイトルは、ラテン語の『ヨハネ福音書』からの1節。古楽という所から直感的にタイトルのラテン語表示が結びついた。「私の行くところ」。関係代名詞ではじまり、その指す場所は、まさに誰も知り得ぬ場所。作曲をする際の信条に近いと感じた。

原始の風の音とも言える噪音から、楽音の根源を築いた西洋ルネサンスへいたる響きの旅。

### 「五群の尺八のためのPentatonic Concerto」 関一郎 作曲／新作初演

この曲は昨年2020年JSPNの委嘱作品として作曲し同年5月第二回定期公演で演奏される予定でしたが新型コロナウイルスの影響で延期となり本日初演される事となりました。

五音音階(Pentatonic)を主として使い合奏協奏曲(Concerto)として独奏部分では尺八本来の繊細な部分を生かし、合奏部分では豊かで重厚な響きを期待して書きました。

ここでは長さの違う6種類、一尺一寸(a管)、一尺六寸(E管)、一尺八寸(D管)、二尺一寸(H管)、二尺四寸(A管)、二尺七寸(G管)が使われ、演奏者は5つの群(グループ)に分かれます。曲の前半では5音音階(Pentatonic scale)により作られる5つの異なるアルペジオ的なモチーフによるトーンクラスター、上管による現代尺八よりはるか昔存在していたかも知れない架空の尺八による即興的な部分、これらと同時進行する古典本曲風旋律が現われます。中間部では軽快なリズム、今日的なハーモニーによるポピュラー音楽風に変貌し、異なる寸法の尺八によるゆったりしたモーダルな即興的な部分の後、現代的なモチーフと伝統的な旋律の混合が展開され、短いトーンクラスターの再現の後、曲は終わります。

2020年、劇変した社会情勢によって、本公演は1年延期されました。2021年の本日、私達がここに集うことができたということは、少なくとも都市における尺八界におきましては、新しい活動様式の扉が開かれたと考え、お喜び申し上げます。

さて、伝統音楽は、各時代の社会情勢に対応して、変化させることで維持できてきたと考えます。また、歴史とは後の人が編んだ物語であると云えるでしょう。そこで、様々な解釈が存在するのは、各人がどの局面に立たれているかで、重視する側面と、それに基づく見解が異なるからであると感じます。よって、多様な文化、様々な歴史観が併存する現代社会において、尺八界を支えるすべての方のお考えにご納得いただける解説はできないと思っております。

本解説は、多種多様なかたちで発展した「尺八楽」において、いま私が向き合っている地無し尺八(および作者)との対話から得られたイメージを、他ジャンルへも膨らませられるかの手掛かりのようなものかもしれません。ですから、以下は「ひとつの見方」であることをお断りしておきます。なお、これまでの知見と諸文献より根拠も探りながら、この大役を務めさせていただきます。

私は、20世紀の後半に、日本音響学会の音環境談話会の幹事を担当したことがあり、サウンドスケープ／騒音公害について、音響学的な議論が為される現場で働きました。まず、当時の見解が記された『新版 音響用語辞典』(日本音響学会編、コロナ社1988、2003発行)を確認してみましょう。

楽音合成:

電子楽器や音楽の制作に使える要素となる音の信号を電気的な方法で生成すること。(後略)とあり「楽音」単独の項目はありません。ちなみに、これは、私のもうひとつの専門領域でしたが、特に邦楽器については、いまだにまったく納得がいく合成ができないという状況にあります。

噪音: 一般的には、雑音と同義語であるが、三味線の撥音や尺八のムラ息、箏の摺り爪の音など、日本の楽器に現れる雑音的な音色に対して肯定的に使用する総称。西洋音楽の基準では音楽に適する音は雑音の少ない、いわゆる「楽音」であるが、日本を含めアジアには「楽音」とは別の音楽文化があり、西洋の基準からすれば「騒音」と呼ばれるような音を伝統的に生かしてきた。(全文引用)

騒音: 望ましくない音。(中略)いかなる音でも、聞き手にとって不快な音、邪魔な音と受け取られると、その音は騒音となる。(後略)

雑音: ①振幅、位相、周波数などが統計的に不規則に変動する音または振動。(中略)対応英語noiseは、雑音と騒音の両方の意味に使われるが、日本では、雑音と騒音は一般に区別して使われる。(後略)

よって、音響学的には噪音と騒音は明確に区別されています。また事情によっては「音楽」も騒音に成り得るものであり、一方、噪音は英語にはできないアジア固有の概念であると取れます。そこで、英語で「噪音」について語る際には「noise」と呼ばずに「sound」を広め、やがては英語辞書に載るようになれば幸いです。

本日、お集まりの皆様は、邦楽に慣れ親しんでおられる方が多いと拝察いたしますが、これまで私たちは、邦楽器と伝統音楽は在って当たり前という社会を謳歌してきました。そこで「楽音」も「噪音」も区別なく、邦楽として捉えているのではないのでしょうか。たとえば『日本音楽大事典』(平凡社1989)や『邦楽百科事典』(音楽之友社1984)には、単独の項目はありません。つまり、本来、これらはひとつの音なのであって、分けるべきでもなく、かつ対峙するものではなかったと考えられます。

前回、第1回定期公演のテーマ「鶴の巣籠」は「噪音」のオンパレードであることが知られていますが、これは演奏技法的に見れば、尺八音楽の極みであるといえるでしょう。あるいは「噪音の世界に遊ぶ」という捉え方もできるかもしれません。

そこで「噪音」とは、楽器固有の特徴(材質と構造)によって、あらかじめ準備された現象が、演奏者の内発的衝動によって体系化されたものであり、その工夫の過程で、自然界の環境音との近似を直感した結果としての意味づけが、地域毎の自然環境の中で共有され、維持されている当該文化固有の様式であるといえないでしょうか。

私は、日本に暮らしながら、西洋音楽環境出身の尺八家であることを自覚しています。だから、敢えてそこから出来るだけ遠くへ離れていきたいと念じてきました。尺八奏者はなぜ「首を振るのか」尺八音楽にはなぜ「コロ音」や「カラ音」が必要なのかの答えは、ひとつではないわけですが、私の「明暗尺八」習得と実践活動のなかで、絶えず参照してきたのは、日本文化でいわれる「間」の問題です。それは「楔吹き」や「フリ」のタイミングにおける一音毎に生じるその場限りのリズム感として集約できます。その感覚は、時間を計るのではなく、空間の距離を詰めることであると察します。そのことを、武道の呼吸とも通じるとおっしゃる方もあります。人は、噪音により気配を感じます。また噪音には、日本の少し前の生活様式であった、和風建築や絹の着物での生活から生じる音にも似た心地よさがあります。

一方、西洋音楽史上の20世紀前半、前衛的な新音楽様式の一端に「騒音音楽」という概念がありましたし、20世紀後半の「ノイズ・ミュージック」も先鋭的な魅力がありました。それより少し後に訪れた現代邦楽ブームにもまた、騒音の刺激的な側面が強調された「ムラ息」が多用される作品が見受けられました。それらは「騒音的である」と捉えられていたと言えるでしょう。現代においても、虚無僧尺八や都山流本曲の伝承者は、共通に「古典にはムラ息はない」と述べておられますので、尺八楽においては「噪音」と「騒音的ムラ息」は異なる音楽様式の奏法であると位置づけられます。

邦楽において、高品位な「噪音」は、動作から生じる小さい音に耳を傾ける感性と、日本古来の自然観によって編み込まれた魅力的な側面であるとすれば、未来の伝統邦楽において、それがたとえ都市のコンサートホールが中心である場合でも「噪音＝楽音」となるような工夫に注力することによって、世界中の音楽の中で、邦楽の伝統は高く評価されていくと私は信じます。

たとえばピアノでD音をポンと弾くと、それは「レ」でしかない。あると言えばグラフで書いたように綺麗に音が減衰していくだけ。フルートの人は毎日「ロングトーン」の練習が欠かせない。同じ高さの音を音程や強弱が揺れることなく、できるだけ長く吹き続ける。それは限りなく純粋な音に近づける努力。しかし、尺八はそうではない。

同じ「ロ」の音を吹いても、吹き出しから音が安定するまでに、様々な音が鳴る。ピアノのように「レ」だけが鳴るなんていう単純なものではない。音が安定してからも、息や唇のほんの少しの変化によって音は極彩色に変化する。そして、そのことは奏者によって異なり、また、同じ奏者でも楽器によって、日によって異なる。ただ、残念なことに、そうした音の変化に気がついている奏者は少なく、そのため、それをコントロールできる奏者も少ない。

奏者によって、楽器によって、その出てくる音は異なるので、記譜することができない。練習で奏者に直接、「その高い方でヒーと鳴っている音わかりますか?」「そこで息を急に細めたらどうなりますか?」「その指使いのまま上の音に移れますか?」「今の感じですか。もう一度やってもらえますか?」と永遠と禅問答みたいな時間が続く。それをしても無理な奏者もいる。その多くは西洋音階を吹き慣れている奏者。恐らく彼らはフルートと同様に音を安定させることに注力し過ぎているのだと思う。でも、尺八の本当に美しさはそこにはない。

ひとつの音を吹き始めた瞬間、まずは、息が唄口にかかるまでの「シュー」という息の音がする。

- (1)そして、息は唄口から管の中に入り、物理現象通り開管の振動がはじまり、管楽器本来の音が鳴りはじめる
- (2)しかし、ここからが面白い。普通の管楽器であればそこで安定するのに、奏者が恐る恐る吹き込んだ息の量通常量に増やそうとした途端、その開管の原理は破綻して、管自体の空鳴り現象が起こる。
- (3)急にガソリンを過激に投入したためにシリンダー内での燃焼を継続できなくなり、エンスト状態になるのと同じように、本来の力が一端途絶える。「ポー」という原始的でお腹に来る音が鳴り響く。そして、次の瞬間、音は一気に上方へ跳ね上がり「ショアアア」と極彩色な倍音がいくつも飛び散る。
- (4)そして、その閃光がなかったかのように、本来の音に瞬間で戻る。
- (5)この間、約1秒。

(4)の高音に吹き散る倍音は、奏者によってまったく異なる。そして、ほとんど発音しない奏者もいる。(3)の空鳴りの時間も奏者によって異なる。この時間が長い奏者ほど、(4)のきら星が美しい。そして、その奏者は(3)の時間もコントロールができる。(でも、多分本人はそのことを意識していないけど)仕方ないので、その音のチューニングには禅問答のようなもので調整を続ける。楽譜や記号のようなもの、尺八の吹き方など、こちらが伝える手段がないので、「もう少しこうした」「ああしたら」と微妙なチューニングが続く。僕はその中で、奏者の出せる「最大公倍数」の妥協点を探す。

あるアメリカの尺八奏者は「私はNew Yorkerなので人から批判されるのに慣れている。だから何でも言ってください」と言われ1時間弱ひとつの音について二人で努力したことがある。また、尺八のオリジナル曲を初めて依頼されたときの奏者は、高次の倍音をチューナーで計り、意図しない音を消す努力をし、後には聴こえるようになったという。(彼はその訓練のために十二指腸潰瘍になったと主張していたが……)

最近の若手は凄い!その数週間の努力や、数時間の禅問答を全く必要としない人種が登場してきている。「これなんかどうですかあ?」「こんなこともできますよお〜」この数十年の尺八奏者の進歩は凄まじいと感じた。本番前の限られた時間内で僕は「ふわあー」と圧倒されるばかりで、「じゃあ、2番目のやつで」とお願いするのが精一杯で、その吹き替えられる違いが何であるのか突き止められていない。そして、その例示された標本は、音がしっかりと立ち上がったときのパターンであるので、時間と共に微細に変化する音についてはディスカッションしたことがない。

こうした色彩豊かな音は古典を学び訓練された奏者に多い。古典の楽曲にはそれだけでさまざまな音が隠されている。これを言葉か記号で表現ができれば良いのに……と、古典曲を聴きながらいつも夢見ている。私は尺八曲を書く作業はいつも古典曲を耳に入れ、尺八のその上方での美しいたなびきを頭の中に呼び起こす作業からはじまる。その音は、奏者が気づいていないので、だから作画的な感じのする音ではなく、管が音と音の間に自然に作り出す音がそこに存在している。

これまで書いてきたのは、あくまで「吹きはじめ」の現象だけ。

このほかにも「吹いている中で息の量が変わったとき」「長く伸ばしているとき」「息が苦しくなったとき」「低音を吹いているとき」「高音を吹いているとき」「メリ音の音程を無理に合わせようとしたとき」「強く吹いて弱くしたとき」「弱く吹いて強くしたとき」「二音をなめらかにつないだとき」「二音を乱雑につないだとき」「音程が大きく変わったとき」「音程を保つためにフォークフィンガリングをしたとき」などなど、永遠とそうした現象が起きる時点を示せるけど、そこにそれぞれ数十のパターンが存在して……なんとか書き止めたけれど、やはり、奏者による違いが多過ぎ、未だに的確な指示できないでいる。

## 尺八音の解析と作曲

こうした音をなんとか表現して、奏者に伝えようとこれまで様々な方法を試みてきた。

まずは、周波数分析。……… 続きはJSPN公式ホームページで

<紙面の関係によりお二人の文章は抜粋して掲載しております／全文はホームページにて公開致します>





Consisting solely of professional Shakuhachi musicians, the Network was founded in July, 2018 for the principle purpose of enhancing the value of Shakuhachi music and musicians, and contributing to the development and diffusion of Japanese culture. Recognizing the diversity, personality and individuality of Shakuhachi music, the Network boosts research on and improvement of the instrument itself, promotes research and analysis of Shakuhachi music, and encourages information-sharing regarding playing techniques and teaching; and by means of flexible ideas and a high level of musicianship based on the abundant experience of its members, the Network intends to become a source of communication and promotion for new Shakuhachi music in its ongoing activities.

## ■日本尺八演奏家ネットワーク [JSPN]

<顧問> 川瀬順輔

<特別会員> 研究者/作曲家/制作者/有識者 ※50音順/13名

愛澤伯友 神田可遊 黒河内茂 小菅大徹 志村 哲  
高橋久美子 田中隆文 谷垣内和子 長尾 敬 野川美穂子  
藤本 草 前田智子 森重行敏

<正会員> 演奏家 ※50音順/73名

青木琳道 芦垣皋盟 阿部大輔 イオ・バヴェル 石垣征山  
石川利光 岩田卓也 大河内淳矢 大賀悠司 大山貴善  
岡田道明 小濱明人 柿塚 香 加藤奏山 加藤秀和  
金子朋沐枝 神永大輔 川崎貴久 川俣夜山 川村葵山  
川村泰山 菊地河山 鯨岡 徹 工藤煉山 倉橋容堂  
小林 純 小湊昭尚 酒井帥山 阪口夕山 坂田梁山  
設楽瞬山 柴 香山 白鳥良章 神 令 菅原久仁義  
関 一郎 善養寺恵介 素川欣也 竹井 誠 武田旺山  
田嶋謙一 田中黎山 田中康盟 田辺恵山 田辺頌山  
田辺冽山 田野村聡 徳丸十盟 友常毘山 中村仁樹  
難波竹山 野村峰山 野村幹人 橋本竹咏 長谷川将山  
原郷界山 藤田天山 藤原道山 淵上ラファエル広志  
古屋輝夫 本間豊堂 眞玉和司 松岡幸紀 松本宏平  
見澤太基 三塚幸彦 三橋貴風 元永 拓 森田柗山  
山口連山 山崎北山 米澤 浩 米谷和修

## ■第2回定期公演スタッフ

実行委員長 菅原久仁義  
事務局 田辺冽山 松本宏平  
舞台/進行 工藤煉山 大賀悠司 大山貴善 工藤煉山 武田旺山  
田嶋謙一 淵上ラファエル広志 本間豊堂 山口連山  
感染対策 野村峰山 石垣征山 岩田卓也 大河内淳矢 小濱明人  
小湊昭尚 坂田梁山 田野村聡 見澤太基 元永 拓  
受付 神 令 川村葵山 柴 香山 善養寺恵介 田辺恵山  
田辺頌山 原郷界山  
撮 影 井上大輔  
デザイン 酒井利政  
企画制作 田辺冽山

## 尺八奏法講座 —プロから学ぼう 尺八奏法— <オンライン限定「zoom」開催>

プロの尺八演奏家達はどのような「奏法」を  
「どのような場面で使っているのか?」そのために「どのような練習をしているのか?」

【第6回】<sup>2021年</sup>7月24日(土) 受付 15:30 / 開講 16:00

講 師 徳丸十盟 ※休憩を含む2時間程度

テーマ 『細かな運指のテクニク』<sup>邦楽ジャーナル誌連載</sup>  
『琴古流の秘密』と連携して<sup>「琴古流の秘密」と連携して</sup>

■12月に第1回~6回奏法講座のアーカイブ配信予定です

## 尺八サロンコンサート vol.2

Shakuhachi Salon Concert organized by JSPN Vol.2

—尺八アンサンブルの諸相—明治から令和へ—

2021年 9/14 (火) 18:30 open / 19:00 start

日暮里サニーホール・コンサートサロン

前売 ¥4,000 / ¥3,000 (サポーター・学生)

当日 ¥4,500 / ¥3,500 (サポーター・学生)

■プログラム 「光明へ」本居長世作曲 「清姫」金森高山作曲  
「新作/初演」冷水乃栄流作曲 他



公式ホームページ

<https://jspnweb.wixsite.com/jspn>

Eメール [jspn.sec@gmail.com](mailto:jspn.sec@gmail.com)

日本尺八演奏家ネットワーク

**JSPN**

Japan Shakuhachi Professional-players Network



日本尺八演奏家ネットワーク

# JSPN

Japan Shakuhachi Professional-players Network

## サポーター〈賛助会員〉募集のお知らせ

JSPNは新たな尺八音楽発信の源として2018年に設立された、国内唯一のプロ尺八演奏家団体です。国内外での活発な尺八音楽の情報発信、そして豊富な経験を元に柔軟な発想や演奏力をもって新たな提案を行っていくために、「サポーター(賛助会員)」への御協力をお願い申し上げます。

### 特典

- ・主催イベントの割引・優先販売
- ・サポーター限定情報の配信
- ・動画などサポーター限定コンテンツも多数配信予定
- ・その他当団体活動に関する優先的なご案内

### 年会費

個人:2,000円 団体/法人:20,000円

※ご寄付も随時受け付けております。

### 会員期間

4月1日より翌年3月31日まで

### 入会方法

以下の事項を明記の上JSPN事務局までメールでお申し込みください。

・氏名 ・メールアドレス ・電話番号 ・住所 ・会員種別(個人/団体・法人)

JSPN事務局メールアドレス(お間違えの無いよう送信ください)

**[jspn.sec@gmail.com](mailto:jspn.sec@gmail.com)**

ホームページ(<https://www.jspn.org/>)からもお申込みいただけます。

または、以下お申込みフォームにご記入の上、演奏会・イベント時に受付へお渡し頂いても構いません。

## JSPNサポーター申込フォーム

会員区分  個人  団体/法人

(フリガナ)  
氏名

(フリガナ)  
団体/法人名

※団体/法人会員のみ

住所 〒

電話

メール

※PCから受信可能なアドレスをご記入ください